

アカジンの曳縄釣漁具・漁法の指導

指導員 諸見里 聡・伊禮勇雄

1. はじめに

アカジン（和名スジアラ）は、サンゴ礁域に生息しており沖縄県では高級魚の類に属し、重要な漁獲対象の一つである。

その漁法は、曳縄釣、石巻落とし等の他に潜水器による矛突漁業がある。糸満地区では、このアカジン曳縄釣漁業は約20年前頃から行なわれており、漁法は元来手釣でしかも幹縄の材質が鉄線であったため、揚縄時に一苦労した様子である。

しかし、その後自動釣機の導入や幹縄材質（現在、単線ステンワイヤー）及び擬餌の改良など又併せて漁具・漁法の技術的な面について創意工夫し、漁獲高を順調に伸ばして来た。

この様に、糸満地区でアカジン曳縄釣漁業が実績をあげている中、東村の国頭漁協の漁業者から特にこの漁具、漁法の指導要望があり、アカジン曳縄釣漁業の先駆者である糸満漁協の大城健次氏と金城猛の協力を得て実施した。

2. 指導概要

(1) 実施地区 東村慶佐次

(2) 実施期間 昭和59年 5月28日

(3) 実施方法

イ. 学習会……この漁具、漁法の技術指導をするにあたって、漁具の構成と操業方法について説明した。

ロ. 漁具製作の実習……釣針、ナイロン、ステンワイヤー等の結索と擬餌の作り方の指導をした。

ハ. 乗船実施指導……水深45m～80mの漁場で乗船実施した。（図－1 参照）

(4) 参加人員 18人

(5) 協力機関 糸満漁協、東村役場

3. 漁具・漁法

(1) 漁具の構成及び仕様については図－2 参照

(2) 漁法及び操業方法

イ. この漁具を操業する場合、まず魚探を見ながら操業し、船速は漁場の深さにより左右される。

ロ. 普通、操業する船速は5マイル位であるが、浅い漁場に向う場合には船速は速くなる。
（6.5マイル）

ハ. 操業する際の幹縄（ステンワイヤー）の流す長さ10mに対し水深1m位だと思えばよい。

ニ. 幹縄（ステンワイヤー）を揚げる時、自動釣機のギヤーは高にし、自動釣機（NK－3A

F型)のドラムの1回転が1 m位巻揚げするものと思えばよい。

ホ. 曳縄時の擬餌の位置は、海底から5 m以内に保つこと。

ヘ. 船を反対方向に運行する時には、幹縄(ステンワイヤー)を半分まで巻揚げ、船速は早くする。

ト. 魚が釣獲された場合は、エンジンはストップせずスローにし魚を揚げる。

チ. その他擬餌の色は、天気や漁場によって異なる。

4. 結 果

以上の様な操業方法で、約1時間乗船実施を指導したが、皆初めてのことでありしかも漁具の取扱いや技術面での不慣れがあったため、一部漁具の損耗があった。

又、魚の当りはあったものの自動釣機(ちびっこMF)の巻揚げの力が弱かったため、大きな魚がかかった時は釣獲することができず、結果として2 kgのアカジンを1匹漁獲した。

5. 効 果

普及指導後、東村の漁業者は夏場のアサヒガニ漁の合間にアカジン曳縄釣漁業を操業している様であり、1人当たり1日平均3尾～5尾漁獲がありこれまで多い時には約20 kgのアカジンを釣りあげている。

現在、アカジン曳縄釣漁業をしているのは2～3人しかいませんが、冬場にむけてこの魚の値段が高くなるので、今後は本格的にする漁業者が増えるものと思われる。

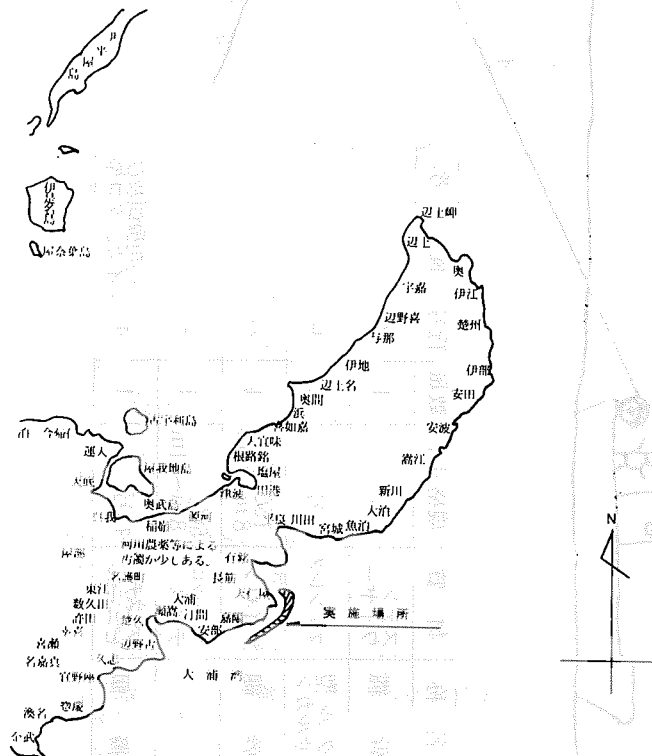


図-1 乗船実施漁場

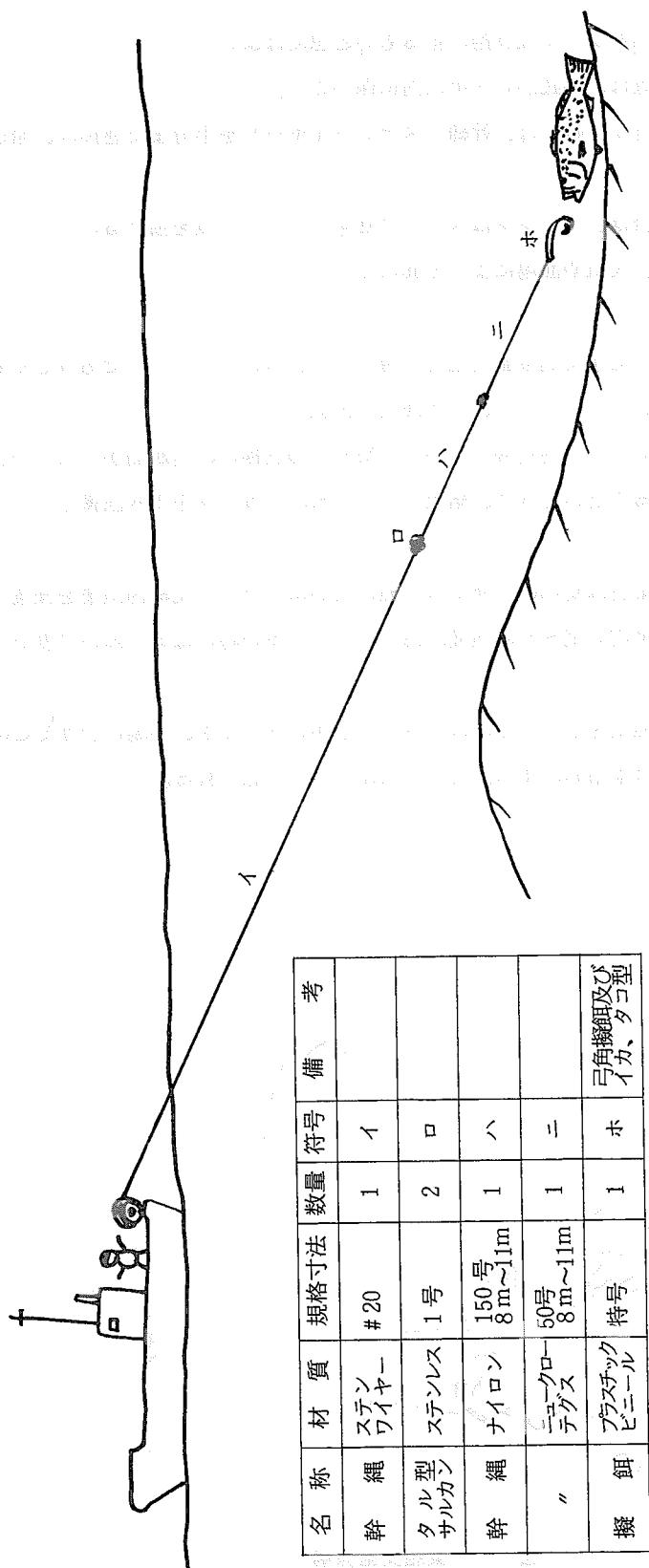


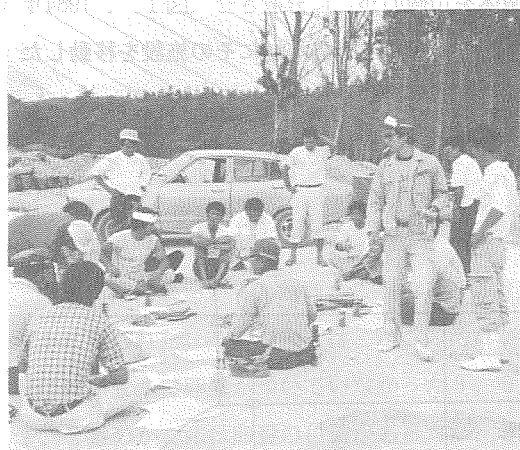
図-2 アカジン曳縄釣漁具の構造及び仕様



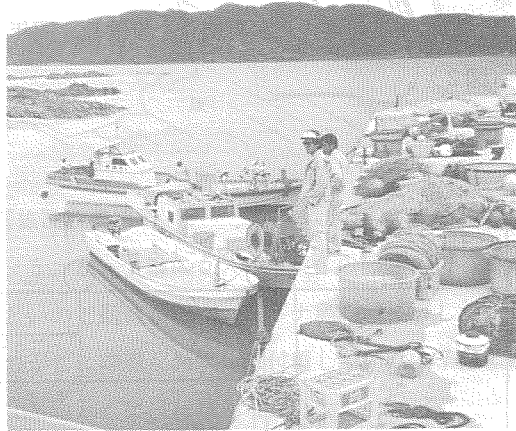
漁具製作の指導の大城健次氏（左）と
金城 猛氏（左2人目）



漁具製作後の質疑応答



皆、輪になって一生懸命勉強中



出港前の慶佐次港



有銘湾を背に、さあ一漁場へ
東村役場の当山氏と沖縄市役所の
中村氏（手前）



漁場での操業風景